

伊藤昇の歌曲をめぐる——日本の「未来派」への一考察——

## Noboru Ito and Japanese “Futurism”

竹内直

1920年代後半から1930年代にかけて、日本の作曲界では新しい音楽を創り出す気運が高まり、それは日本の歌曲創作においても例外ではなかった。この時代の日本において、とくに先鋭的な歌曲作品を発表した作曲家が伊藤昇（1903-1993）であった。伊藤昇は複調、多調、シェーンベルクの無調、アロイス・ハバの四分音階といった音楽に関心を持ち、この時代の伊藤昇の歌曲を詳細に分析すると、伊藤の関心を反映した音楽語法が数多くみられる。

本発表では伊藤昇の歌曲創作の音楽語法上の特徴を概観した上で、伊藤の歌曲を（1）同時代のほかの日本の作曲家による歌曲との比較、（2）1930年代から活動を始めた日本の在野の作曲家の特徴であるメディア＝音楽雑誌を通じた西洋音楽の受容という観点から考察する。伊藤昇は戦後の日本の芸術歌曲の歴史記述から完全に消えてしまっているが、本発表ではその理由と背景についても考察したい。

伊藤昇は日本の「未来派」と呼ばれることもあるが、この「未来派」という呼称によって、かえって伊藤昇の作品が把握しづらくなっている面もあるように思われる。本発表の主眼は、日本の「未来派」の作曲家伊藤昇の音楽の実相を明らかにすることである。